

# 「夢に見ゆ」考

岡 部 政 裕

## 一 ユメニミエタマフ（源氏物語）

薫・匂宮と二人の男の愛を受け、身のふりかたについて思い悩んできた浮舟は、三月も二十日過ぎになると、ある行動を決意せざるを得なくなる。匂宮は、二十八日の夜、京に浮舟を迎えようと言ひ、薫は四月十日と決めてゐるからである。その時、浮舟の母（中将）から、娘の身を案じて手紙が来る。日本古典文学大系「源氏物語」（以下、大系本という）によって記せば、次のとおりである。

寝ぬる夜の夢に、いと騒がしくて、見え給ひつれば、誦経、所々、せさせなどし侍る。やがて、その夢の後、寝られざりつるげにや、ただ今の、昼寝して侍る夢に、「人の忌む」といふ事なん、見え給へつれば、驚きながら、たてまつる。よく慎ませ給へ。人離れたる御住まひにて、時々たぢよらせ給ふ人の御ゆかりも、いと恐ろしく、悩ましげに物せさせ給ふ折しも、夢のかかるを、よろづになむ、思ひ給ふる。参り来まほしきを、少将のかたの、なほいと心もと

なげに、物の怪だちて悩み侍れば、「片時もたち去ること」と、いみじく言はれ侍りてなん。その近き寺にも、御誦経みぎきょうせさせ給へ。<sup>(1)</sup>（浮舟）

作品論の上から、この手紙の存在意義は極めて大きい。母が宇治に見舞いに来てしまつては、浮舟の入水の決意は鈍るだろうし、家出もむずかしくなつてしまふ。浮舟にある行動を起こさせるには、母が来ていないほうがいい。今の夫（常陸介）との間の娘（少将の方）のお産が近くて都を離れられないという状況設定は、みごとというほかない。

さて、今は、傍線の部分だけを取り上げることにする。初めの「寝ぬる夜の夢に、いと騒がしくて、見え給ひつれば」は、御身（浮舟）が、私の夢に現れたというのである。文法上からは、「御身」（主語）が省かれていて、「見え給ひ……」が述語である。自分の娘ではあるが、薫の思い人になつてゐるのだから、「給ふ」という尊敬語（四段活用。品詞は補助動詞、または助動詞とする）を添えてゐるのである。娘の夢を見たには違いないが、正確には、娘が夢にお見えになつたという言い方で

ある。

さて、あとの所は、青表紙本では、「見え給つれば」とある。写本では語尾を書かないことが多いので、語尾を補って、普通は「見え給ひつれば」とするが(例えば、日本古典全書・源氏物語評釈・日本古典文学全集など)、大系本では「見え給へつれば」とし、卑下と解している。ここは、『人の忌む』といふ事(なん)が主語であるが、それは「夢に病人を見ること」とも「夢に葬礼を見ること」とも言われている(大系補注参照)。いづれにしても、娘が病気になるか、亡くなったかした夢であろう。だとすれば、浮舟(あるいは浮舟を中心とした事件)が主語になっているのであり、初めの所と同じように、「見え給ひつれば」としたほうがいいことになる。

もう一つ理由を添えれば、謙譲語の「給ふ」(下二段)は、「見る」「思ふ」「聞く」「知る」など、自分の動作・精神作用を表す語に付くのであり、「見ゆ」という語には付かないからである(「見ゆ」の主語は自分ではない)。

今のわれわれは、普通「夢を見る」と言っているが、ここでは「夢に見ゆ」となっている。「夢」と、「見ゆ」(または「見る」)との結び付きは、古代においては、どうなっているだろうか。これは、単にことばの問題ではなく、夢をどう考えていたかという、考え方の問題でもあるに違いない。

## 二 イメニミュ・イメニミル(万葉集)

まず万葉集から始めよう。万葉集では、ユメではなく(ユメ

は別語)、イメであるが、『万葉集総索引』<sup>(2)</sup>によれば、全部で一〇一例あり、伊米(一六例)、伊目(二例)、伊昧(二例)、夢(八一例)、已具(已目の誤りか、一例)、伊麻(伊米の誤りか、一例)と表記されている。

このイメと、ミュ(またはミル)とが結び付いたかな書きの例をあげる。<sup>(3)</sup>

イメニミュ

伊米

○ただに逢はずあらくも多くしきたへの枕ざらずて伊米。尔し美延む(05・八〇九)

○しまらくは寝つともあらむを伊米のみ尔もとな見要つつ吾を哭し泣くる(14・三四七二)

伊目

○真野の浦の淀の漣橋情ゆも思へや妹が伊目。尔し所見(04・四九〇)

伊昧

○現には逢ふよしも無しぬばたまの夜の伊昧。仁を継ぎて美延こそ(05・八〇七)

イメニミル

伊米

○秋されば恋しみ妹を伊米。尔だに久しく見むを明けにけるかも(15・三七一四)

○……しきたへの袖反しつづ寝る夜おちず伊米。尔は見れど……(17・三九七八)

万葉集では、イメニミユという言い方が多いが、念のため統計を取ってみると、

イメニミユ 六〇例  
イメニミル 二二例  
イメラミル ナシ  
イメミル ナシ  
その他 一八例

計 一〇一例

となる。

「その他」というのは、「イメカトソミル」(二三四一、イメがニという助詞を伴っていない)、「イメニミス」(三三二七、ミスという語は、今、考察の対象にしない)以下、「イメノアヒ」(七〇二)、「イメノゴト」(二八七・三三四)のように、「シユ」「ミル」と結び付いていないものを一括したものである。

万葉集では、イメラミル・イメミルは無く、イメニミユ・イメニミルに限られており、しかも、イメニミユという用法が多い。「夢」は、見るものでなく、対象が主体となって、夢に入ってくる(夢に現れる)ものであった。

だから、右に挙げた「情ゆも思へや妹が夢にし見ゆる」(四九〇)の歌についても、「思へや」の主語を自分とするか、妹とするか両説があるようであるが(大系本頭注)、わたしは、妹ととって、「心から思ってくださいるからか」と考えたほうが穏やかだろうと考える。

「夢に見えこそ」という言い方は、万葉びとの愛好した慣用句である。『万葉集各句索引』<sup>(4)</sup>によれば、八例(六一五・二五〇一・二六三四・二八四二・二九五七・三一二〇・三三二七・三二八三)を数え、句を隔てた例(例えば、右に挙げた八〇七など)を加えればもっと多くなるが、単に夢に見えてくれ、といふのではなく、私の夢に見えるほど私のことを思ってくれと、強く相手にあつらえ望む気持ちを表すものであろう。

### 三 ユメニミユ・ユメニミル(古今集・伊勢物語)

平安時代になると、イメはユメに転じる(イメの語源は、辞書に説くように、イが寝、メが目で、眠っていて見るもの意であろう)。

まず古今集では、「夢」が二九箇所に使われている。<sup>(5)</sup>

ユメニミユ(三例)

○よひよひに枕定めん方もなしいかに寝し夜か夢に見えけん(II・五一六)

○恋ひ死ぬとするわざならしむばたまの夜はすがらに夢に見えつつ(II・五二六)

○夢にだに見ゆとは見えじあさなあさなわが面影に恥づる身なれば(14・六八一)

次の歌は、「夢に」を省略したものと見られるが、ユメニミユの例に数えなかった。

○思ひつつぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを(12・五五二)

ユメニミル (三例)

○はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける (12・五七五)

○うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしき (13・六五六)

○もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬ仲ぞはるけかりける (15・七六八)

次の歌は、「夢に」を省略したものと見られるが、ユメニミルの例とはしない。

○うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめとき (12・五五三)

古今集の用例は、

ユメニミユ 三例

ユメニミル 三例

ユメラミル ナシ

ユメミル ナシ

その他 二三例

計 二九例

となつてゐる。

ユメニミユ・ユメニミルという言い方は、万葉以来の用法であるが、両者が同数になつてゐることが注目される。また、「その他」が著しく増えているのは、詳説は省くが、夢が単に見るだけのものではなく、抽象的、比喩的なものに拡大されたからであらう。

伊勢物語では、「夢」が六箇所に使われている。<sup>(6)</sup>

ユメニミユ (一例)

○むかし、男、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「こよひ夢になん見え給ひつる」といへりければ、男、

思ひあまりいでにし魂のあるならん夜深く見えば魂結びせよ (一一〇段)

ここに初めて「見え給ふ」と敬語が使われていることに注目したい(敬語は、歌に少なく、散文に多いことを、他日実証したいと思う)。

なお、女の夢に男が見えたのは、男が女のことを思うあまりに、魂が抜け出していったのだとするのであり、遊離魂説といえよう。この遊離魂説は、万葉以来の伝統的な考え方を示すものである。<sup>(7)</sup>

伊勢物語の用例は、

ユメニミユ 一例

ユメニミル ナシ

ユメラミル ナシ

ユメミル ナシ

その他 五例

計 六例

となつてゐる。

四 ユメヲミル・ユメミル(源氏物語・新古今集)

さて、もう一度源氏物語に戻ることしよう。ここでは、「夢」という語は、一四四箇所に使われている。

ユメニミユ(一四例)

○伊予のかたのみ思ひやられて、夢にや見ゆらむと、そら怖ろしくつつまし、(桐一〇<sup>9</sup>⑬)

○ただこの枕上に、夢に見えつるかたちしたる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ、(顔一三八⑤)

なお、「夢に」が省略されたと見られる次のような例は、やはり、ここに数えない。

○さやかに見え給ひし夢ののち、(蓬一〇五①)

ユメニミル(五例)

○君は夢にだに見ばやおぼしわたるに、(顔一六五⑩)

○夢にてもおはしまさむ所を見むと、(玉三七七④)

ユメヲミル(六例)

○尋ね聞こえまほしき夢を見給へしかな、(紫一八二①)

○中将の君も、おどろおどろしう、さま異なる夢を見給ひて、(紫一〇二⑩)

ユメミル(二例)

○夢見給ひて、(叢六七⑧)

○夢見る人はあるものか、(横一八二⑫)

源氏物語で初めて、ユメヲミル・ユメミルが現れる。用例の統計は、

ユメニミユ	一四例
ユメニミル	五例
ユメヲミル	六例
ユメミル	二例
その他	一一七例
計	一四四例

となる。

なお、ユメニミユのうち、ユメニミエタマフと、タマフを伴った言い方は、第一節に挙げた例のほか、

○昼寝の夢に、故宮の見え給ひければ、(蓬一六五⑬)

○夢などに、いとたまさかに見え給ふ時などもあり、(玉三五九⑭)

三三二⑥

○夢にも、かかる人の親にて重き位と見え給はず、(葉上三三二⑥)

○夢にだに見え給はぬよ、(総一六八④)

○故宮の、夢に見え給へる、(総一六九①)

○宮の、夢に見え給ひけむさま思しあはするに、(総一七八⑤)

○いささかまどろめば、夢に見え給ひつつ、(浮二二五⑬)

八⑤

などがあって、決して珍しい言い方ではない。さて、新しく登場したユメヲミル・ユメミルは、新古今集にも引き継がれてる。

新古今集で、「夢」という語は、仮名序・詞書・左注で一七箇所、歌で七八箇所、計九五箇所に使われている。

ユメニミユ (一六例)

○一条院かくれ給ひにければ、その御事をのみ恋ひ嘆き給ひて、夢にほのかに見え給ひければ、(08・八一二詞書)  
○いもやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ (02・一〇六)

ユメニミル (一例)

○寂蓮、人々勸めて百首歌よませはべりけるに、いなびはべりて、熊野にまうでける道にて、夢に、何事も衰へゆけど、この道こそ世の末に変わらぬものはあれ、なほこの歌よむべきよし、別当湛快、三位俊成に申すと見はべりて、…… (18・一八四四詞書)

ユメヲミル (四例)

○……春日へまゐるべきよしの夢を見たりけれど、……

(19・一八五八左注)

○けさはしも嘆きもすらいたづらに春の夜一夜夢をだに見で (13・一一七八)

ユメミル (一例)

○忘れても人に語るなうたたねの夢見てのちもながらしよを (13・一一六一)

新古今集の用例は、

ユメニミユ 一六例

ユメニミル 一例

ユメヲミル 四例

ユメミル 一例

その他

計

七三例

九五例

である。源氏物語に現れたユメヲミル・ユメミルが、歌にも使われるようになったことに注目したい。

### 五まとめ

以上、源氏物語から出発して、その前後の文学作品に現れた「夢」の用法を調べてきたのであるが、ここで一覧表にまとめておきたい。

計	その他	夢を見る	夢を見る	夢に見る	夢に見ゆ	万葉集	古今集	伊勢物語	源氏物語	新古今集	備考
						60	3	1	14	16	
101	18 (18%)	0	0	23	60						「夢」は、万葉集ではイメ、古今集以下ではユメ。
29	23 (79%)	0	0	3	3						
6	5 (83%)	0	0	0	1						
144	117 (81%)	2	6	5	14						
95	73 (77%)	1	4	1	16						
375											

この表から、どんなことが読み取れるだろうか。

(1) 古くは、「夢に見ゆ」「夢に見る」という言い方が多かった。中でも、「夢に見ゆ」が多いのは、夢は、自分から見るの

ではなく、相手に主体があつて、その働きかけによつて見る、というよりも、見える（相手の遊離魂が夢に入り込んでくる）と考えたからであらう。

(2) 「夢を見る」「夢見る」は新しい言い方で、主体が自分に移ってきたことを示すものであらう。

(3) 「その他」は、万葉集では、全体の一八％にすぎないが、古今集以後になると、八〇％を前後する率になる。夢が、単に見えるもの、見るものであつた時代から、多様な内容に拡大された時代に移つてゐることを示すものである。

次に、「夢に見ゆ」「夢に見る」「夢を見る」「夢見る」を、図示して考えてみよう。

### 1 夢に見ゆ



ある対象（文法的には主語）が、夢というスクリーンに映つてきて、ある人（例えば私）に見えるのである。

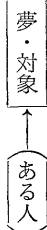
### 2 夢に見る



第一と違ふのは、夢とある人との間の矢印が逆になること、したがつて、ある人（例えば私）が主語になる。

### 3 夢を見る・夢見る

「夢を見る」「夢見る」の語は、内容的に同じと見て、一括して考える。



この場合、「見る」のは夢そのものであり、対象は、すでに夢の中に入り込んでゐる。つまり、夢と対象は別個の存在ではなく、一体になっているといえよう。主語は「ある人」で、第二と同じ。

ちなみに、「見る」は一段活用であるが、現代語の文法では、文語の二段活用が一段活用になつてゐるので、二段活用のほうが古い形と考えられがちである。ユメムという上二段活用の動詞が出来たのは、どうやら明治時代になってからのことらしい。日本国語大辞典によれば、ユメムは、尾崎紅葉「続々金色夜叉」、国木田独步「わかれ」に現れるという。

さて、「夢に見ゆ」といふような考え方は、「夢」だけではない。

○わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず（万葉、20・四三二）

「影」（姿・幻）が浮かぶのも、相手（妻）が自分を恋慕っているからである。

○塩津山うち越え行けばわが乗れる馬そつまづく家恋ふらしも（万葉、03・三六五）

自分の乗っている馬がつまずいたのは、家（家人）が私を恋慕っているからである。

古代においては、相手が自分を恋慕していると、それが「夢」に現れたり、「影」になつたり、馬がつまずいたりする

のであって、働きかけの主体は相手にあると考えたのである。現代では、こういう考え方はすたれてしまったようであるが、何か重大な事態が起こると、やはり、同じような考え方で、言い方が復活していることに気づく。例えば、「夢に現れる」「夢枕に立つ」というのがそれである。

本年三月十日の新聞の切り抜きをわたしは保存している。それには、二年前、東京足立区の兄妹が素行の悪い弟を殺し、実家の床下に埋めておいたが、最近殺した弟が夢枕に立ってどうしようもないので自首したという記事が載っている。この場合自分から見ようと思つて夢を見たのではない。やはり、相手(対象)が、——時には自分の意志や希望に反して——夢の中に入り込んできたのである。

注(1)引用にあたっては、傍注、振仮名の一部を省き、漢字を

新字体に改めるなどの処置をした。以下の引用も同じ。

(2) 『万葉集総索引』(正宗敦夫編、昭和四〇六年、白水社)。四九年発行の平凡社版が便利である。

(3) 『万葉集本文篇』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之著、昭和三八年、塙書房)による。

(4) 『万葉集各句索引』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之著、昭和四一年、塙書房)

(5) 総索引があるが、手に入らなかつたので、大系本によつて数えた。仮名序の証歌は撰者の注かどうか不明であつた。歌も重複するので省いた。引用は大系本による。

(6) 『伊勢物語総索引』(大野晋・辛島稔子編、昭和四七年、明治書院)による。

(7) この段、文面はこのとおりであるが、裏があるかもしれない——。女の側から、「あなた(男)のこと、夢に見ましたよ。(あなたが私を思っていてくださるわけはありませんか) 私があなたのことを思っている証拠よ」と訴えてきたのに対して、男が、「わたしがあなた(女)を思っているからあなたの夢に見えたのですよ」と、はぐらかしたものだ。

(8) 『対校源氏物語新釈用語索引』(吉沢義則・木之下正雄著、昭和二七年、平凡社)による(新釈は、昭和一一一五年)。

(9) 「桐」は桐壺巻の略称、「一〇」は新釈のページ数、<sup>⑬</sup>は行数を表す。以下同じ。

(10) 『新古今集総索引』(滝沢貞夫編、昭和四五年、明治書院)による。引用は大系本によつた。

(一九七六・九・二)